様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月１９日現在

機関番号：16301
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2011
課題番号：22650050
研究課題名（和文）　日欧家系譜・家系情報群の社会経済史的立体表現による系譜学と歴史学との架橋
研究課題名（英文）　Bridging the Genealogy and History by the socio-economic historical 3D expression of family trees and genealogical information in Japan and Europe

研究代表者
高橋　基泰（MOTOYASU TAKAHASHI）
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：20261480

研究成果の概要（和文）：
本研究は、普遍的ながら史料的価値が低いとされてきた家系譜および家系情報を、村落・地域コミュニティ単位で、新たに年代および社会経済史的データを組み込む立体的座標配置により群体として復原する。家系情報は、単体の家ではなく群として社会的文脈に措定してこそ十分な理解が期待できる。本研究計画は、家系情報の態様（パターン）国際比較を、この貴重な情報資源の有効活用が十分でない近世・近代農民家族を対象におこなう。

研究成果の概要（英文）：
In spite of its universality, the value of genealogical information, in particular family trees, has been underestimated as historical evidence. This project aims to reconstitute the family trees complex on a 3D coordinate axis. This has been done by putting the family trees and genealogical information within the boundaries of the village or regional communities and then added data from socio-economic history. In order to understand genealogical information adequately, it is placed in its social context rather than simply dealing with a single family line. This research project makes the international comparison of genealogical patterns', in particular for the villagers in the early modern and modern period about whom there is insufficient information.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,400,000	0	1,400,000
2011 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,800,000	420,000	3,220,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学・人文社会情報学
キーワード：歴史情報・家系譜・家系情報群・日欧比較・立体表現・社会遺伝

１．研究開始当初の背景

近年の社会経済史の分野、とりわけ地域研究の深化は著しく、家族を対象にした研究も増え、隣接分野である歴史人口学や社会人類学との学際も進んでいる。だが、系譜学は独自の論理で完結し、利用する資料は共通なのに現在にいたるまで歴史学とはほぼ没交渉であり、歴史学もその史料的信憑性への疑念から家系譜の価値を低くみてきた。

日本においては、家系図は古来支配階層に関しては権威のよりどころとして重要であり、とくに日本系図学の祖、太田亮以後系譜の蓄積も大きい。だが、系譜が実利的意味をともなって作成されたのは近世までで、それ以降は系譜分析研究において目につくものはとぼしい。とくに農民・庶民レベルでは、実証研究となると皆無に等しかった。

また、また、ヨーロッパ大陸では、国境が地続きであるため、もともと国単位での家系譜は存在しにくいが、それであるがゆえに家系譜作成の現実的必要があり、広く各地に見出せる。だが、時代毎の政治状況、とくに第二次大戦ドイツにおける家系譜を用いた人種政策の影響は依然として根深く、家系情報を用いた家族史研究の着手は、ごく最近のことなのである。

他方、英国においては歴史学・系譜学双方の分野での資料的発展には時間差があり、歴史家による家系図の積極的採用はごく近年のことである。元来、系譜学は紋章学とともに貴族・貴顕層の家系の権威を裏づける学問であったが、次第により下層を扱うようになっている。もっとも、それらはあくまで個別の家族史の群れであり、系統だったものではない。とくに、最近ではヴァーチャルな立体家系図作成ソフト（MacFamily Tree5 など）の普及とともに家系譜ネットワーク・データベース（GEDCOM など）の進展は著しい。だが、それらの図象に本研究計画のように社会経済史的データを組み合せた家系図の立体表現は、元来その発想がないためか、存在しない。それゆえ、その膨大なストックを専門学術のレベルでは有効に活用できないままである。

くわえて、従来系図という視覚的表現は、本・論文など紙媒体におけるスペース上の物理的制約もあり、社会・歴史的文脈の情報を欠いてきた。

２．研究の目的

本研究「日欧家系譜・家系情報群の社会経済史的立体表現による系譜学と歴史学との架橋」は、普遍的ながら史料的価値が低いとされてきた家系譜および家系情報を、村落・地域コミュニティ単位で、新たに年代および社会経済史的データを組み込む立体的座標配置により群体として復原する。家系情報は、単体の家ではなく群として社会的文脈に措定してこそ十分な理解が期待できる。本研究計画は、「社会的 DNA」ともいうべき家系情報の態様（パターン）国際比較を、この貴重な情報資源の有効活用が十分でない近世・近代農民家族を対象におこなう。計画の意図は、資料は共通ながら現在に至るまで互いに異次元をなす歴史学と系譜学との接点を見出し、その接点から社会「遺伝」理解の新たな地平を開くことである。

３．研究の方法

本研究は、家系図および家系情報を、立体的座標配置により群体として復原し、日本・英国・ヨーロッパ大陸においてデータは豊富ながらも有効活用のなされていない近世・近代家族を対象に、歴史学・社会経済史と系譜学との接点を見出し、新たな研究領域を切り開く。研究期間は 2 年間であり、その期間中に、１）既存である日英村落データベースからの情報を組み合わせ、時系列上で立体的に表現し、まず準拠枠を構築する、２）日英欧における家系譜・家系情報の残存状況を概観する、３）電子化されているものを中心に国際比較のためデータベース規模で資料を収集し、準拠枠にもとづき態様の分析・比較をする。

【方法】本研究の基本方法は、既にデータベース化されている家系譜・家系情報の立体的座標配置である。三次元（3D）的表現としては以下のようにごく初歩的なものであるが、ここに時間軸を固定して組み入れ、個人の生没年度がわかれば、その生存時期と寿命の長さとが視覚的に理解できるようにする。1 人 1 列で表す（図 1)。これを一単位とし、系統図を構築する。角度を変えることで、単年度の系譜関係を横断的にとらえることも可能である（図 2)。これらと社会経済史データとの相互の関係を保ちながら、地図を含む自然

環境データと組み合わせる（図3）。この立体家系図群は社会経済史データベースと連動して構築される。

４．研究成果

平成 23 年度は、近世期日英欧近世・近代家族に関する本研究の重要な基礎となる立体家系図群生成を実施した。既にデータベース生成（MacFamily 6）を果たしている日本の上塩尻村およびイギリスのウィリンガム教区の事例を準拠枠として、日英双方でのデータ追加調査を遂行した。夏期には、英国で中世欧州経済史ならびに系譜学の専門家（ケンブリッジ大学Ｐ・スパフォド名誉教授）のレビューを受け、同時にデータ調査をおこなった。また、2 月にはドイツおよびフランスを中心に欧州大陸の家系譜研究動向調査および資料収集を実施した。ドイツについては、本研究代表者は南部のシュワーベン地方シュトゥットガルト公文書館および近郊農村部を調査し、連携研究者平井進教授が北部、とくに北海沿岸部を中心に史料紹介を公刊した（国際比較研究会編『国際比較研究』第7号（2011）、資料、149-73 頁）。フランスに関しても南部ピレネー地方を中心に系譜学研究の動向調査に着手している。その過程での分析結果は一部、業績に掲げた国内・海外学会報告（社会経済史学会全国大会および東北部会、国際農業史学会の各セッション）で活用している。さらに、方法論の確立のために、基本資料としてＭ・スパフォド著『コントラスティング・コミュニティーズ』の一部翻訳も行い、社会経済史と系譜学の架橋に寄与するものとして上記『国際比較研究』誌に収録した。

平成 24 年度は、前年度に引き続き近世期日英欧近世・近代家族に関する本研究の重要な基礎となる立体家系図群生成を実施した。既にデータベース生成（MacFamily 6）を果たしている日本の上塩尻村およびイギリスのウィリンガム教区の事例を準拠枠として、日英双方でのデータの追加をしている。予想通り、そのデータ量が膨大なものとなり、いよいよその立体表現の必要性が増した。夏期には、日本で時間地理学の専門家（お茶の水大大学大学院人間文化創成科学研究科・宮澤仁准教授）のレビューを受けた。12 月には連携研究者平井進教授の教示でドイツ北部を中心とする史料分析を実施し、また系譜表現方法を検討した。『国際比較研究』第 8 号掲載の研究ノート（(業績・論文③）はその成果の一部でもある。くわえて方法論の確立のために、基本資料としてＭ･スパフォド著『コントラスティング・コミュニティーズ』の一部翻訳を引き続けて行い、社会経済史と系譜学の架橋に寄与するものとして同『国際比較研究』第 8 号に収録している。そして、これらの活動を通して得られた着想により、立体表現のプロトタイプを 2012 年 6 月現在生成中である。このプロトタイプ表現が完成した暁には、既存の MacFamily６に入力済みの大量データを比較的短時間に処理し、本研究計画の主要テーマである、アカデミックな用途に耐えうる立体家系譜が使用可能となる見通しである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 平井進、「18・19 世紀前半北西ドイツ北海沿岸地方の領邦官吏と自治組織役職者：Landschaft Süderdithmarschen」、国際比較研究、第 8 号、2012 年、57-85 頁、査読有

② 高橋基泰、「日英村落史的対比研究方法論・2011」、東北学院大学経済学論集、第 177 号、2011 年、259-76 頁、査読無し

③ 高橋基泰、「近代イギリス遺言信託制度の『土壌』: ケンブリッジ州ウィリンガム教区女性遺言者家系情報の分析」、信託研究奨励金研究論文集、31 巻、2010 年、33-46 頁

〔学会発表〕（計４件）

① 高橋基泰、「家系譜および宗門改帳にみる同族と姻戚」、日本村落研究学会第 59 回研究大会、2011 年 10 月 29 日、木魂館（熊本県阿蘇郡小国町）

② 高橋基泰、「人口と同族の構造と動態：農村社会の市場経済化と凶作対応」、社会経済史学会東北部会、2010 年 12 月 14 日、東北大学（仙台市）

③ Motoyasu Takahashi, ‘ Communal Organisations in the English Fen-edge Area: for a Study of Historical Parallel and Contrast with the Warichi (Land Distribution) System in Echigo,

Japan’，オックスフォード一名古屋大学国際環境史セミナー、2010 年 9 月 8 日、名古屋大学（名古屋市）

④ 高橋基泰、「飢饉と人口変動：上田藩上塩尻村における天保の凶作・飢饉の事例研究」第79回社会経済史学会全国大会、2010 年 6 月 20 日、関西学院大学（兵庫県西宮市）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.cpm.ehime-u.ac.jp/MotoHomePage/Motohome.html

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋　基泰（MOTOYASU TAKAHASHI）
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：20261480

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
平井　進（SUSUMU HIRAI）
小樽商科大学・商学部・教授
研究者番号：30301964